

# 姫路城中堀を守るには

姫路城を「不戦の城」と呼ぶことがあります。幕末に姫路藩に対する追討令を受けた備前藩が城西に布陣し、景福寺山に据えた大砲で城内へ射撃を行ったことはありましたが(これについては、藤原龍雄『姫路城開城』神戸新聞総合出版センター、2009年に詳しい)、それを除けば、たしかに姫路城で合戦が行われたことは、少なくとも池田輝政の姫路入封以後ありませんでした。おかげで「世界文化遺産」と自慢することができるわけです。

幸い姫路城で戦さをする事もなかったのですが、これはあくまで結果論で、姫路城主となった歴代の大名が一様に姫路での「平和」を恒常的に確信していたわけではありません。戦士としてのアイデンティティーを維持するためにも、「いつ何が起きるかわからない」と真摯に有事の際の行動規範を考えていた大名もいたのです。そこで本号では、徳川家臣団きっての武門、榊原家の史料から、有事における姫路城の防御体制について紹介してみます。(以下、図1については、兵庫県立歴史博物館『城郭のデザイン』1998年、p.76-77による)。

図1は、すでに各所で紹介されたことがあります。姫路城に対する攻撃の可能性が生じた場合の守城隊形を描いた城郭図で、榊原家旧蔵の絵図です。姫路城の欠点とされる城北の外堀の途切れた箇所も、有事には堀の掘削が想定されており、その予定線も描かれています(↓の箇所)。それでは、この図を少し詳しく見ていく

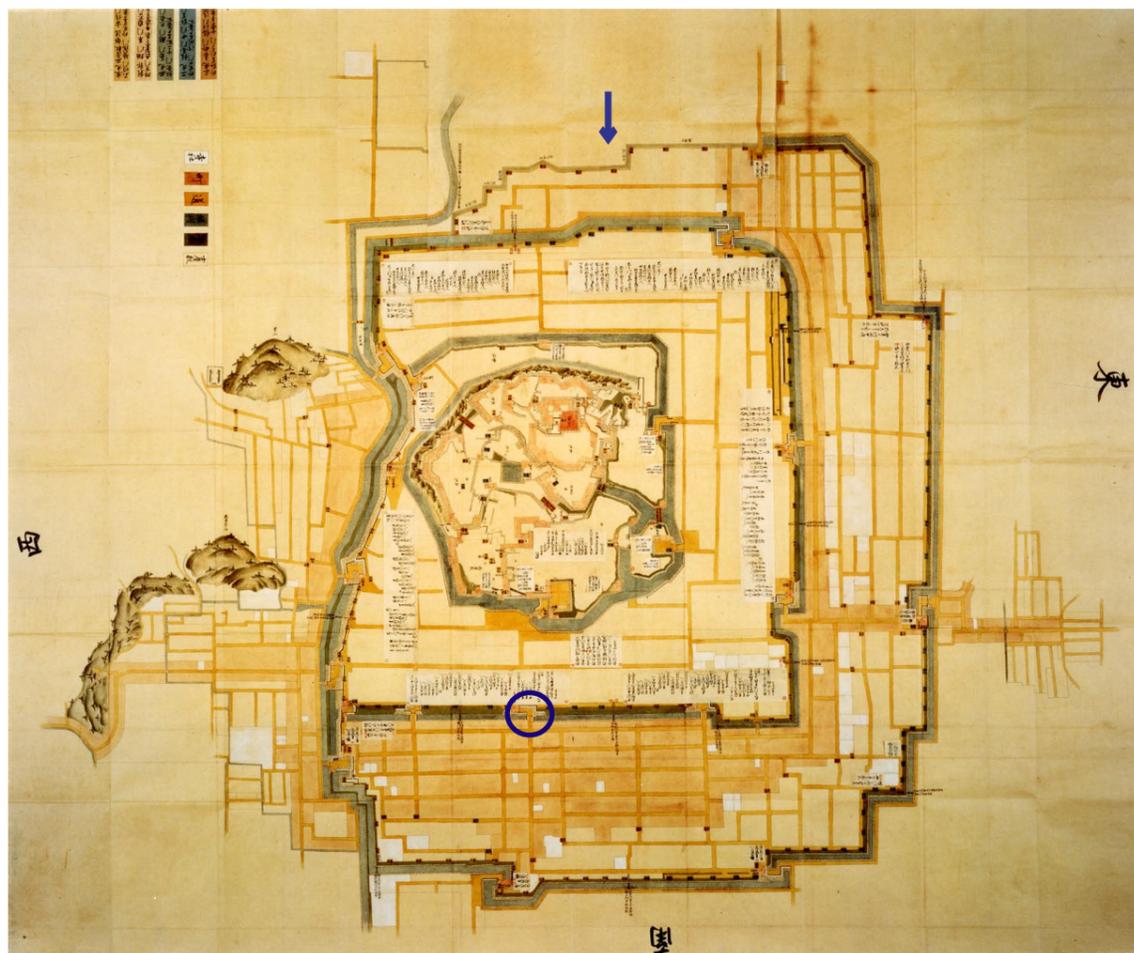


図1 防備布陣図(城郭研究室蔵)

ことにします。

本図の最大の特徴は、籠城時、中曲輪の堀・土塁を防衛線に想定し、城を守備する7部隊の兵員構成と守備範囲を明示している点にあります。そのうち、1隊が内曲輪を、その他6隊で中曲輪の防衛線を守るといものです。内曲輪の部隊には「中老退役并隠居之面々」が含まれていますので、主戦力ではなく後方部隊みたいなものでしょう。

城の正面である南部中堀沿いには2隊が配備され、ほかの4隊とは異なり、弓足軽20人が増備されています。この弓足軽を除けば、6隊は鉄砲足軽40人、長柄之者30人を主兵力とした均質的な兵員構成になっていました。これらの部隊は中曲輪における持場が支えきれなくなると内曲輪へ退き、そこで決められた持場を死守することになりました。

また、この図から判明するのは、有事の際に城内各所に番所が細かく設置されるということです。例えば、姫路城下町の場合、武家地と町人地の境目に普段から木戸が常設されていたかどうか不明ですが、少なくとも有事の際にはその境目に番所を設置することになっていたことは間違いなさそうです。では、なぜこうした番所が城下町に設置されるのでしょうか。その理由を示唆する史料があります(「出軍以後籠城心得覚書之留」)。

一、兼て入置候間者之方より他国異心有之趣告来候ハ、当城へも寄来可申哉、段々忍を差越、敵之様子を窺可申事

(略)

一、町中騒動之虚ニ乗し、狼藉無之様ニ役人相廻り可申付事

普段から敵対する(謀反の意思のある)相手国に対しては間者を送り込むことになっていたようです。当然、相手側も同じ事を考えるでしょうから、当国に送り込まれた間者が、有事には町中で騒動を起したり煽ることも考えられます。そうなれば、それに便乗する狼藉者が現れることも想定されていたのです。有名な「大坂夏の陣図屏風」に描かれた略奪の情景もそれらの中の1シーンでしょう。城主には、こうした危険性を排除するための治安維持装置を設置する責任があったと思われます。

そのほかでは、土塁上に等間隔で番所が設置されているのが目立ちます。各部隊から守備兵が詰めることになっていたのでしょうか、それにしても念の入れようです。ところで、時代は少し下って寛延3(1750)年6月14日、大河内勘兵衛の家臣である水間浪右衛門と高木伝蔵が夜中に豎町の椀箱屋で暴れ、本町で町人を切りつける事件がありました。捕縛された浪右衛門は、「其方儀酒狂之上所を騒シ、其上御堀を越御土居へ上り御要害之所を乗越候儀重畳不届至極候」(『姫藩典制録』十四 侍足軽異変之事)ということで死罪になっています(のちに死罪を免れ、出家)。この記事では、死罪とした一つの理由として城の要害を乗越えたことが挙げられています。事件が豎町～本町で起きていること、大河内勘兵衛邸が中ノ門(○の箇所)のすぐ北にあることから、彼が乗り越えた堀と土塁は中ノ門付近とみられます。

それにしても姫路城の堀と土塁が、夜中にそれも酔っ払いに易々と乗り越えられてしまうなんて…。城郭施設それだけでは、防御性は十分に機能しなかったことがあったようです。有事に際し、土塁上に番所を入念に配置しようとした理由もわかります。



The News of Himeji Center for Research into Castles and Fortifications.

"Shiro Fumi" No.73